二〇二二年九月二日

露けしや草で拭へる花鋏　ひのと
しやがむ子の頭を撫づるゑのころ草　素秀
相聞の鹿の聲きく夜明け前　澄子
ゆくりなく旅に出会ひし流れ星　たか子
自販機は火蛾の虜や近づけず　智恵子

二〇二二年九月一日

雨乞ひの宮に的射る音澄めり　なつき
母子像の伏し目やさしき秋日かな　ひのと
秋風に軋みやまずよ舫ひ舟　たか子
稲妻の折れ入る溪の深きかな　素秀
ゲリラ雨嘘のごとくに星月夜　智恵子
長き夜が足りぬ思ひ出話かな　なつき
四阿に誰かの栞小鳥来る　ひのと

二〇二二年八月三一日

空つぽのゴンドラ霧の山頂へ　ひのと
つる草の絡みつきたる秋簾　せいじ
また来るね小さき指切り夏休み　みきお
川に沿ふサイクルロード葛の花　せいじ
断捨離の逡巡として秋暑し　もとこ

二〇二二年八月三〇日

振り向かず駅に消えゆく帰省の子　なつき
山襞の霧押し上げて雨上がる　たか子
さやけしや駅頭に聴くバイオリン　む　べ
夕霧に湖底めくなり峡の里　澄　子
荒畑を分けて狼藉鹿の道　素　秀
白粉花ねむりに入りし亭午かな　あひる
秋晴や日の匂ひする子のつむじ　ひのと

二〇二二年八月二九日

パフェ崩しながら秋思の銀の匙　む　べ
風呂掃除して帰りたる帰省の子　なつき
一村の命の疎水山澄めり　澄　子
流木をベンチに島の星月夜　ひのと
秋すだれ浜風抜ける海の家　千　鶴
子ら去りて夫婦で分くる缶ビール　なつき

二〇二二年八月二八日

長き夜や凪待つ水夫の針仕事　ひのと
鴨川のデルタにまろび夏惜しむ　せいじ
竹箒はき目くつきり涼新た　うつぎ
山霧の晴れし刹那や鹿過ぎぬ　澄　子
眠る子に癒やされ送る団扇風　かえる
食べる顔浮かべて葡萄送りけり　千　鶴

二〇二二年八月二七日

履き慣れぬ鼻緒ぎくしやく浴衣の子　たか子
団扇手に母の愚痴聞く里帰り　みきお
志し半ばの訃報身にぞ沁む　たか子
相槌をうちつつ秋思募りけり　もとこ
糊ききしエプロン広げ涼新た　む　べ
大富士をかけのぼるやに秋の月　澄　子

毎日句会みのる選・二〇二二年九月四日